

## 結婚儀礼の変遷

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/41395">http://hdl.handle.net/2297/41395</a>

## 8. 結婚儀礼の変遷

吉岡 駿介

1. はじめに
2. 結婚式の年代別事例
3. 結婚儀礼の各要素の概要と変容
4. 現代の結婚式事情
5. 考察
6. おわりに

### 1. はじめに

今回の実習における調査地であり宝立町は、私にとって初めて訪れる地域で、石川県能登半島の先端にある珠洲市内の海辺で自然豊かな地域であり、一週間の聞き取り調査の間、多くの家庭から様々な話を聞いた。その中で私は、冠婚葬祭での部落のつながりが強いという印象を受けた。冠婚葬祭といえば、成人式から結婚式、葬式など多くの人が経験する通過儀礼であるが、そのあり方は地域によって様々に異なり、その地域の特色を体現している文化の一つであるといえる。

私はその中でも、結婚儀礼についての話に関心を持った。結婚といえば、セレモニーホールで行うものというイメージが私の中にあり、かつて家で行っていた宝立町の話はとても新鮮に感じた。その中には、私が今まで聞いたことのないような習慣が多く含まれていた。

そこで、この章では年代ごとに3人の個別事例を挙げ、宝立町の結婚儀礼がどのように行われてきたのか、また、時代の流れでどのような変化が起きたのかを考察する。第2節では家で結婚式を挙げた3人の方の個別事例を年代ごとに紹介する。第3節では結婚の個別事例に見られた各儀礼について年代ごとに比較し、それぞれどのような変遷をたどってきたのかについて考察する。第4節では、それまで述べてきた宝立町の結婚儀礼が現代ではどのように変化してきたのかについて考察する。

## 2. 結婚式の年代別事例

### 2.1 Hさん（中鶴島、女性、50歳代）

Hさんは1977年に自宅で結婚式を挙げた。中鶴島地区における自宅での結婚式はHさんの家が最後だった。相手とは、職場の友人の繋がりから出会い、嫁側の家で結婚式を行い、基本的には男女関係なく、迎え入れる側の家がもてなし、費用もほとんど迎え入れる家が出していた。結婚式当日は、婿が恋路に宿を借りて待機しているので、白無垢に着替えた嫁がナカドや兄弟と車で迎えに行く。迎えに行く人数をあらかじめ迎え先に伝えておいてあり、恋路に着くと、迎え御膳を婿側が用意しており、迎えに行った人で食べた。そして、恋路を出る際に宿にいた人々にお金をまいた。家に戻る前にナカドはあらかじめ、どの程度のナワハリが行われているのかを下見してお金を準備しており、家の手前50メートルほどの位置で車を降り、婿、嫁とナカドでナワハリに105円のお金を入れた包みを渡しながらか家まで歩く。この際、お金が余ることのないよう調節しながら渡し、余ったお金は近所の方へと渡す。5円を渡すのは、ご縁がその家にもあるように祈りを込めてとのこと。また、家に着いたら玄關から外にいる人々に向かってもお金をまいた。家の前で両家から持ち寄った酒を素焼きの盃に入れ、飲むふりをした後にナカドが盃を地面に叩きつけて割った。その後、婿と嫁は家に入る際に水の入っていない桶とタオルで足を洗う真似をする足洗いを行い、ようやく家に入る。桶とタオルは近所の方にあらかじめ頼んで用意してもらっていた。家に入るとまず、神棚、仏壇の順で参り、それからオチツキを食べた。オチツキの中には紅白の餅や、背を向け合う二匹のイワシがあり、イワシは食べずに腹を向かい合わせに置き換えた。式では婿がまんじゅうを大量に持ってきていて、式の翌日の夜に、近所への挨拶回りも兼ねてまんじゅうを配った。この頃は、嫁入り道具はタンス・下駄箱・布団などの生活用品だった。頂いた結納は一度家で飾り、もらった結納のお金の多くをいただき、商品券などを代わりに入れて返した。頂いたお金で背広など買った。頂いた結納の水引の形は鶴であり、返す時には亀の形にした。後式は行わなかった。式の一週間後、婿は実家に里帰りをした。実家に行く際、嫁は婿について行き、御膳をいただく。嫁はすぐに実家から帰ったが、婿は3日ほど実家で過ごしてから戻ってくる。里帰りをする際には嫁側が婿にまんじゅうを大量に持たせ、婿も実家の近所にまんじゅうを配った。

### 2.2 Oさん（宗玄、女性、60歳代）

Oさんは周りからの紹介で相手と出会い、その後ナカドと共にお見合いを行い、結婚に至った。結婚するというと、近所のパーマ屋からうちを使ってほしいと言われるなど、結婚の噂はすぐに近所に広がっていた。1970年の結婚式当日、Oさんの家は婿入りであり、花嫁を迎えに行くのが

10 時頃だったので、それまでに着付けや化粧をしておかなければならなかったが、長い時間がかかった。一般的には婿の家に、嫁が迎えに行き一緒に家に帰るのが、O さんはナカドが迎えに行き、自分は家で待っていた。家に向かう際、ナワハリが行われていて、500 円ほどの祝儀を渡して縄をとってもらった。縄の代わりに竹の棒を出すところもあった。家の前に着いてからは、足洗いは行わなかったが、水合わせは行い、両家から持ち寄った酒を一つの盃に入れ、飲むふりをした後にナカドが盃を叩き割った。そして、婿が嫁の家に入る時と、婿が自分の家を出るときに 55 円や 105 円を入れた祝儀を人々にまいた。家に入ると神棚、仏壇の順にお参りする。嫁入り道具には着物、背広、家具などの生活用品を婿が買って持ってきた。オチツキをいただき、その中のイワシの腹合わせをしたあとに、知り合いの旅館に移動し御膳を食べた。御膳を食べている最中、鯛の骨を入れた大きな盃に酒を入れて回し飲みをする大盃も行った。式中にお色直しは 2 回のみできた。婿がまんじゅうを大量に持ってきており、式の数日後、まんじゅう 11 個とふろしき、お酒を箱などに入れて近所やお祝いをしてくれた方々に配った。どの程度のお祝いをしてくれたのかによって、4 合のお酒を渡すところを一升瓶にしたり、中身は多少異なった。そしてこのまんじゅうは自分ではなく、親戚や近所の人に結婚式の翌日配った。また結婚式の一週間ほど後に、婿は里帰りを実家に帰った。嫁もついて行き、婿の実家で御膳をいただいた後は二人ですぐに帰った。

### 2.3 T さん (中鶴島、女性、70 歳代)

婿との出会いは地域の青年団であり、嫁の叔母がナカドとなり、ナカドを含めたお見合いを行い、1961 年に結婚式を挙げた。結婚式は嫁入りで、婿の家で行い、ナカドと婿の姉、いとこが嫁の家まで嫁を迎えに行った。そして、迎えに行った人たちで嫁の家でごちそうをいただいた。その間に嫁は、家の神棚、仏壇にお参りをした。嫁の実家前でお祝いに来た人々にお金をまいてから、タクシーで婿の家の近くまで移動すると、家の前にはナワハリが行われていた。ナカドがナワハリに 105 円ほど渡して縄をともらい、家に向かった。家の前に着き、一杯の盃に両家から持ち寄った酒を合わせ、嫁は一口だけ合わせた酒を飲み、ナカドが盃を地面に叩きつけて割った。その後、白いエプロンを着た女性が水の入った桶と新しいタオルを用意しており、婿と嫁の足を洗う格好をする。足洗いを終え、玄関の外にいる人々にお金をまいてから、ようやく嫁と婿は家の中へと入る。すぐに嫁は神棚、仏壇の順にお参りをし、着付けを 2 階で行った後、そこでオチツキを食べた。オチツキには背を向け合う二匹のイワシがあり、それは腹を向かい合わせにして食べなかった。家に入ってからオチツキを食べるまでは婿はその場にいなかった。オチツキなどの料理はすべて近所の方を料理人として雇っていて、1~2 日かけてその後の披露宴で出される御膳もすべて作ってもらった。婿も合流してから披露宴が始まり、親戚など 20 人以上が、座

敷でコの字型で座り、ナカドは二人いた。新婦は2階に何度か移動してお色直しを行い、披露宴中は何も食べてはいけなかったので、お色直しのあいだにおにぎり食べていた。披露宴では鯛の骨が入った大きな杯で酒をその場にいる人々で飲み回したり、三三九度も行った。まんじゅうは嫁が1000個ほど持ってきており、近所の人を雇って町内の方に、まんじゅうを翌日に配ってもらった。祝儀をしてくれた方には、ふろしきやお酒、またオシキと呼ばれるお金と一緒に配った。結婚式から一週間ほど経ってから、婿が里帰りで実家に戻った。里帰りの際には婿がまんじゅうを大量に用意し、嫁に持たせ、嫁の実家の近所の方にもまんじゅうを配った。里帰りに婿はついて行かず、嫁は5日ほど実家で過ごしてから婿の家に戻った。また、結婚式の10日ほど後に親戚や近所の方を招いて後式をした。

### 3. 結婚儀礼の各要素の概要と変容

以下に、2節で述べた個別事例と『珠洲市史 第4巻』とを参考とした、当時宝立町で行われていた結婚式の各要素を抽出し、それぞれについての詳細および変化についてまとめた。

『珠洲市史』(1979: 871-899)を基にして、当時の宝立町の一般的な結婚儀礼がどのようなものかを述べると、婚姻の成立までは、仲人が大きく活躍する。仲人は親類や、隣近所の人に頼むことが多く、嫁と婿だけではなくその家族間の仲を取り持ち、結納が行われる。結婚式は嫁を迎えに行くことから始まり、仲人らが迎えに行く先で迎え酒をいただき、タクシーで式が行われる家の近くまで移動する。タクシーを降りると家まで、ナワハリが通路を邪魔しており、仲人がお金を渡すことで縄を取ってもらい、家に向かう。家に到着すると、婚姻の儀礼が水合わせより始まる。玄関で水合わせ、足洗いを行った後に家に入り、大盃を行い本膳に手をつける。式が終わると、まんじゅう返し、後式を行い、それから一週間ほどして花嫁の里帰りがある。

#### 3.1 婚姻の成立まで

##### ・仲人(ナカド)

親類の人がナカドとなり、家の格などを考えて、話をすすめる。また、近い所に縁があれば、改まった仲人を立てなくても、親類などの口利きで、話は充分に通じた。それが、次第に遠方との結婚が増えてくるにつれて、お互いによく知らない家同志を結びつけるために、村の有力者、または仲人を頼らなければならなくなっていくのである(『珠洲市史』)

珠洲市内でもナカドはほとんど、親類の人か、隣近所の人に頼んでいる。頼まれたナカドは、いろいろ話を聞いたり、裏聞きなどをして、家の格などの見当をつけて、娘のいる家へ行くのである。そして、婿、親の様子などの話をする。そのナカドが話を持ってきても、娘には知らされず、

親同士が話し合っているのである。娘とすれば、親を信じて任せてはいるものの、気になる話である。ナカドにお茶を出しながら、チラッと聞いた話に胸をときめかせたという。しかし、親同士は知人などを頼って、裏聞きなどをしていた（『珠洲市史』）。

#### ・結納

結納は一旦家で飾る。Hさんの例にあるように、もらった結納のお金の大半をいただき、商品券などを代わりに入れて返した。もらったお金は背広などを買うときに使う。水引の形は鶴であり、返す時には亀の形にした。水引の道具は、めでたいものは何度でも使えるということで保管している。

### 3.2 嫁（婿）迎え

#### ・迎え酒、迎え御膳

当日、ナカドなど5人くらいで嫁を迎えに行く。迎え先にはあらかじめ、迎えに行く人数を伝えておき、迎えの人たちが到着すると、ごちそうが出た。それを迎え酒、迎え御膳などと呼び、迎えに行った人たちのみでいただいたようだ。

#### ・ナワハリ

縄を張ることで嫁入りの邪魔をすることをいう。近所の人が二人ずつ縄の端と端を持って結婚式が行われる家の50メートルほど手前から通路に縄を張り、他部落から来る花嫁の行列の邪魔をし、祝儀を貰おうというのである。花嫁を先導するナカドがお金を渡していきナワハリを解いてもらう。縄を張るのは女や子供がほとんどで、縄を張るのは子供だが、金をばらまくときには子供の母親も出てくる。

「ナワハリは嫁が新しい家族のもとでも食べるものに困らないようにとの意味合いがある」（中鶴島、女性、50歳代）とのことだが、なぜこのような意味合いになったのかは不明。結婚式当日、第2節の事例にあるように、あらかじめ仲人はどの程度の数のナワハリが行われているのか下見しており、お金を先に用意しておく。お金は105円や205円など一桁目が5になるようにして渡す。これには、ご縁があるようにとの意味があった。そしてお金も余らないように調整しつつ渡し、余ったお金は近所の方へ渡しに行った。また、「縄の材料には藁を使うことにこだわっていて、以前紅白の紐を編んだ物でナワハリをしていた人が、年長の方から注意されていた」（中鶴島、女性、50歳代）といった話もあり、ナワハリという名前にもあるように紐ではなく縄を使うことへのこだわりも感じられる。また、「ナワハリがないと寂しいからという理由で、あらかじめ近所の人に頼んでおくことも最近ではある。」（中鶴島、女性、50歳代）といった話もあった。

### 3.3 婚礼の儀式

#### ・水合わせ

たくさんのナワハリを無事通過して、婿の家に着く。玄関前にもたくさんの見物人が来ていて、そこで盃を割る儀式がある。婿の実家と嫁の実家から持ち寄った酒を器に入れて合わせ、1960年代では実際にこれを一口か二口ほど飲んでしたが、1970年代になると新しくその家の者になる方が飲むふりをするようになった。それから、仲人が器を地面に叩きつけて割る。これは「新しくやってきた嫁が生活に馴染めるように」という願いを込めており、また、綺麗に割れると夫婦円満な生活を送ることができると考えられている。水合わせが終わったあと、家に上がり神棚、仏壇の順にお参りをする。水合わせは今日でも行われることがあり、そのための素焼きの器が今でも売られている。式を家以外で行った場合、数日後に水合わせを家で行っている。

#### ・足洗い

玄関前で水合わせがすむと、玄関か庭先で足洗いといって、親類や近所の白いエプロンや服を着た女性が桶と新しいタオルで嫁と婿の足を洗うまねをする。家によっては桶に水を入れたり、入れなかったりと様々である。ナカドはその人に包み銭をあげる。その後、嫁は着物を着替える。着替えたら、姑と共に神仏へ参り、家から持ってきたローソクを供える。

#### ・オチツキ

玄関に入ってから一休みした後、本膳へ入る前に簡単なごちそうを食べる儀礼である。神仏に参った後、オチツキの御膳が出る。この御膳につくのは、嫁さん側の身内だけなので、楽な気の張らないムードで終始する。御膳の左奥には干しいわしが二匹、背中合わせになっているのを腹合わせにする。右奥は黒豆の煮豆、左手前はごはん、右手前は汁。いわし以外は食べてよい。1970年代になると紅白の餅が出てくるようになるなど、オチツキの中身に細かな決まりはないが、イワシは必ずと言っていいほど出ている。

#### ・大盃

本膳の前に、大盃の儀式を行う。鯛の骨が入った大きな輪島塗の盃で酒を回して飲む。これは結婚に限らず、祝い事があり人が集まる時には行われていた。最初は床の間にお膳を二個並べ、左側に杯を大きいものから下に9個重ねて乗せる。お酒を回して飲む時には、右側のお膳に盃を乗せ、お手伝いさんが銚子で酒をつぎ足しながら回していく。結婚式などの祝い事の時には銚子にのしを飾る。また、使う杯の大きさは主人の裁量によって決まるが、特に大きい祝い事の時には一番大きい盃を、「次にも縁起がいいことが続くように」という期待がある祝い事では2番目に大きい盃を使う。

#### ・本膳

大盃などの儀式が済むともう夜も更けてくる。それから酒宴が朝まで続くのだが、この酒宴を、

「本膳」といっている。本膳にはナカド・嫁・女房を正面にして、両側に嫁側、婿側の親類が並ぶ。婿側の方は一戸に一人ずつ座る。その他の人たちは給仕にまわる。

婿は不在である。花嫁は単に婿の花嫁になるだけばかりでなく、その家に迎えた花嫁として、新しく家族の一員となり、やがては一家の主婦になる人だから、本人同士が盃を交わして誓い合うよりも、新しく嫁の親となるものとの間で、固めの盃を交わすことが必要だった。

#### ・嫁入り道具

タンス・下駄箱・布団などの生活用品の他に食料、着物などを買った。これはオチツキを食べる前に家に持ち込んでいた。

### 3.4 式後の行事

#### ・まんじゅう返し

結婚後、嫁や婿が大量に持ってきたまんじゅうを、家の姑もしくは親戚、近所の人が翌日に祝儀をしてくれた家に、挨拶回りも兼ねてまんじゅうを配る。昔は重箱に詰めて回っていたが、今は菓子屋で箱詰したものを配っている。一軒ごとに11、13、15...と奇数個配ることが恒例である。中身は特に決まりがなく、紅白・たいこまんじゅう・草餅・なが餅など、今ではケーキやバームクーヘンなど洋菓子を配ることもあるが、昔は和菓子が一般的であった。まんじゅう返しでは、お酒と風呂敷も一緒に配ることが一般的とされている。頂いた祝儀の程度によってお酒の量を変えるなど中身に差がついていた。

#### ・里帰り

里帰りとは結婚式のあと一週間位に実家に嫁、または婿が帰ることを言う。1960年代では嫁と婿が揃って帰るということはなかったが、1970年代では揃って帰るようになっている。一般的には実家に着いてから2～5日ほど過ごしていたようだ。また、里帰りの際にも、嫁、婿を送り出す家がまんじゅうを大量に用意しており、実家に帰ったら近所に結婚の報告も兼ねてまんじゅうを配った。

#### ・後式

結婚式の数日後に行われる宴会。近所や親類の人を招き、結婚式の御膳に少し劣る程度のごちそうを頂いた。

### 4. 現代の結婚式事情

現在は金沢市や珠洲市の方までバスで移動し、式場で式を挙げる人が多い。家に帰ってからいくつかの儀礼を行う家もある。

Hさん(2.1)の家では、Hさんの娘は金沢のホテルで結婚式を挙げた。Hさんはココロヅケと言って、1,000円ほど入れた包みを多く用意し、移動した際のタクシーの運転手や、ホテルのスタッフにご祝儀と言って配った。結婚式中では宝立町で行われていたような儀礼は行わず、ホテルに全て任せた。式の数日後、吉日などに近所に娘の結婚の報告を行った。その際、お祝いをしてくれた人にはHさん夫婦がまんじゅうや洋菓子などを配った。これはまんじゅう返しの名残で2015年現在も行われているという。

また、Oさん(2.2)の家では、Oさんの息子が2000年ごろに愛知県名古屋で結婚式を挙げた。その時は相手方にまんじゅうではなく、輪島塗の箸を渡し、Oさんの家の近所や親類には、本人たちではなくOさん夫婦がまんじゅうを送った。

## 5. 考察

これまでの節では、3軒の結婚式の事情を詳しく取り上げ、また、各儀礼についての概要を取り上げてきた。この節では、これまでの節を振り返りながら考察を行いたい。

仲人は、3軒の事例共に出てきている。『珠洲市史』によれば、男女が出会う機会がなかったからこそ活躍した仲人であったが、職場などで出会えるようになっても仲人が出てきたことは、親類や隣近所との繋がりを深めることが目的であったのではないだろうか。仲人をやってもらうにはお金がかかるが、それでも雇っていたことには、地域の繋がりの温かみを感じる。

宝立町での調査において、「もう結婚式は家では行ってはいない」といった話をよく耳にした。しかし、「昔はそういうものだった」と話した方が多いことから、儀礼の形式が定まっていたことが分かる。

『珠洲市史』(1979)と第二節を比較すると、敷の当日に嫁を迎えに行くとき、仏壇や神棚へのお参り、里帰りなど、昔は婿が関わらない儀礼が多かったのだが、それが1960~70年代の間で徐々に婿も儀礼に関わってくるといった変化が見られる。1960~70年代と言えば、高度経済成長期の最盛期から衰退期にあたり、男は自分の仕事で忙しくあまり家庭的な仕事に携わらないという風習が徐々に、嫁と協力して家での仕事、役割を果たすように変化してきたのではないかと感じた。

その他の点においては、まんじゅう返しで、まんじゅうではなく洋菓子にするなど多少の変化は見られていたが、大半の儀礼はあまり変わらず結婚儀礼の伝統を継承していたと言える。しかし、珠洲市に結婚式場ができたり、金沢への交通の便がよくなることで、結婚式場で結婚式を挙げることが徐々に増えてきたことで、家での結婚式であるからこそ行えてきた儀礼が減ってきたことは間違いない。これについて、町の方々に話を伺うと、「若者があまり宝立町に残らなくなっ

た」(宗玄、女性、60歳代)、「せめて家や近所と言わなくても、能登市内で結婚式を挙げてさえくれば、昔ほど丁寧ではないが、それなりに昔の結婚式に近いことはしてあげられる」(中鶴島、女性、70歳代)と昔を思い悲しむ人もいたが、「実際、結婚式場を利用して結婚式を挙げたほうが面倒も少なく楽だから良い」(上八幡、男性、70歳代)といった話をする人の方が多かった。従来その町に存在した文化の継承には、年配の方々だけでは面倒と感じられることが増えてくるとも要因であると感じた。また、若者が町から出ていくことによって、儀礼を町以外で行うことの難しさや、その儀礼に込められた願も伝えることができなくなっているのではないかと感じた。

また、紹介した事例は婿入りのものが多かったが、嫁入りと比較してみると、婿が関わらない儀礼には嫁が行っている点が両者とも同じく、それ以外は単に婿入りの婿と嫁の逆を嫁入りで行っていた。迎え入れる為の儀礼、迎え入れてもらう為の儀礼というように婿と嫁の行為は別れていたようである。

現在も宝立町の少子高齢化は進行しており、ますます高齢者の割合が増えてくると思われる。そうすると、結婚式などの冠婚葬祭によって部落の繋がりを強めていた宝立町において、昔のように人々の繋がりがあったからこそ伝わってきた文化を継承することもますます難しくなることだろう。

しかしまた、そういった地域に出向いてみて、金沢など比較的都市部に比べると、宝立町は近所付き合いも深く、私にはとても温もりのある町に思えた。結婚に関する話を伺ってみると、どの家でも楽しそうに、昔を懐かしみながら笑顔で話してくださり、そういった人の思い出に優しく在り続ける文化をこれからも大切にしてほしいと感じた。

## 6. おわりに

7泊8日という非常に短い滞在期間での調査であったが、宝立町の人々はこの地域、そして近所の人に強い愛情を持っていることが感じられた調査であった。

私は3年間、金沢市に住んでおり、珠洲市史宝立町とは私にとってはまったく見知らぬ土地で、不安と緊張を抱きながらの調査であったが、宝立町の人々はとても暖かく迎えてくださり、お話を楽しく伺いながら今回の調査を終えることができました。

今回、報告書を執筆していて、いただいた情報を細かく丁寧に理解、そしてまとめることができた自信はありませんが、このような形で文章にできたことは、宝立町の皆様のご協力あってこそだと心の底から思っています。

今回調査にあたり、知らないことばかりで理解に苦しんでいた私にお話を聞かせてくださった宝立町の皆様にこの場を借りてお礼を申し上げます。私たちの実習調査にご協力いただき、本当

にありがとうございました。宝立町の発展をお祈り申し上げます。